

旗岡巡查

吉川英治

青空文庫

雲雀も啼かぬ日ひばり な ひ

一

河が吼えるように河の底から、船頭の大きな声が、

「――船止めだとうつふなど」

「六刻かぎりで、川筋も陸も往来止めだぞうつむつ おか」

船から船へ、呶鳴り交わしてから触れ合っていた。

下総しもうさの松戸の宿場。

雪はやつと、降りやんではいたが――

きのうからの大雪は、この地方にまでわたっていた。
ように黙ってしまい、菜の花も青い麦も雪の下だった。

けの天変地異ではなかったのである。

醤油船しょうゆぶねの権十ごんじゅうは、

三月の桃の節句だ。雲雀は死んだ
万延元年まんえんのこの日は、江戸表だ

「お松、何をいつまで、愚図愚図してるだ。まだ燃え付かねえのか」

煙に顔を顰めながら、岸へ繫綱を取っていた。

権十の娘は、まだ十五、六の小娘だった。

「だって、父つさま、薪が濡れているで、いくら燃やしても、燃えやしねえだもの」
煤りかけている七輪へ顔を寄せて、眼を紅く爛らせながら艫の方からいう。

すると隣の干鰯船から、仲間の八が、苦を剥くつて、

「——権十、飯の支度か」と顔を出した。

「そうよ、これからだ。嬬あに死なれてからというもの、お松の奴アまだからつきし子供だしよ、美味え飯なんぞ喰ったこたあねえ」

「そういつちやあ、お松ツ子が可哀そうだぜ、十五にしちやよく働く方だ。なア、お松ちゃん」

八は、着物をかえていた。そして岸へ上がって行きながら、

「おらあ、町へ行つて、一ぺい飲むつもりだが、どうだい権十、つきあわねえか」と、誘った。

「さあ？ ……」

権十は、生返辞なまへんじだった。父娘おやこが二人きりの船世帯なので、十五の小娘を一人残して行くには忍びないらしいのである。

八は、陸おかから、

「なあ、お松ツ子。帰りにや簪かんざしを買って来てやらあ。いい子だから、お飯まんまが炊たけたら、一人で喰べて、先に寝ていな、いいだろ」

「ああいいよ」

お松は、岸を仰いで笑った。船頭の娘なので、河かっ童ぼのように髪の毛は赤いし、色は黒いが、眼元がぱっちりしていて、研みがげば今に、潮来いたこでお職しよくが張れるなどよく擲から擲かわれたりするほど、どことなくそんな素質の小娘だった。

二

この地方ばかりでなく、諸国とも、今日から一切「鳴物停止なりものちようじ」のお布令ふれだった。

七軒町の遊廓くるわも、雪明りの中に、しいんと軒を並べて戸を閉しめていた。野良犬の影が、今夜は妙に目立って見える。勿論、張店はりみせはしていないし、燈火ともしびの洩れるのさえ遠慮が

ちに、ペンという音さえ洩れて来ないのである。

「よせよ」

「いいったら」

「おめえはいいだろうが、おらあお松坊が、淋しがっているから」

「何いッてやんで。女房に死にわかれて、てめえだって、満更、淋しくねえこともあるめえが」

「だって」

「まア、来いしたら」

何処かで、ベロベロに酔っぱらって来た八と権十だった。犬ころのように、首と首とを絡み合つてよろけて来る。そして、細目に開けた大戸の隙から手招きしている鼠鳴きねずみなに呼び込まれ、そのままふらふらと登楼あがってしまった。

——それから、部屋へわかれて、権十もつい深く眠ってしまったらしい。

「……おやつ？」

と、何かの物音で、彼は眼を覚ましたのである。蒲団の中から首を擡もたげ、急に、お松のことでも思い出したのか、慌あわてて着物を着かえかけると、

「……叱つ」

と、彼の敵娼あいかたがいった。その敵娼の女は、襖ふすまに耳をつけて、奥でする高声へじつと、息をこらしていたが、

「ア。お陣屋の衆だ」

と呟いて、闇の中にわなないていた。

三

「不埒ふらちな奴だ」
おもて

表梯子の上に突つ立つて、三名の役人は呶鳴っていた。

陣屋の同心達であろう。しかし、いつものようにぞろりと長羽織などは着ていない。馬ば乗り袴はかまを括り上げ、物々しげに脚絆きやはんまでつけているのだ。朝から駆け廻っているらしい疲れた顔や背中に、雪泥はが刎ねあがっているのも、凡事ただごとの姿ではなかった。

その前に平伏して、謝あやまり入っている新造や、やりての雇人やといにん達を睨めすえて、その三名は、

「だまれ、だまれっ」

と、耳を藉かさない。

「吾々を、眼も耳もない木偶でくと思ひおるのか。——今、たしかにこの二階で、大声で唄を吐ほざいていた奴がいる」

「客ではあろうが！」

この二人が極めつけた最後に、もう一名の同心が、

「——鳴物停ちやうじ止というお布令ふれを其方どもは何と心得おるのか。唄ならば大声で謡うたつても

かまわんという所存か。しかも今日の如き天下の非常の場合に、客を登楼させて遊ばすな

どとは、言語道斷。——登楼あがる奴もあがる奴だし、遊ばせる奴も遊ばせる奴だ。不心得極

まる奴輩やつぱら——大目に見ておくことはできん。楼主と、その客をこれへ出せつ」

とうとう、楼主も来て謝っている様子であつたが、

「詫言わびごとだけで済むことではない。かりそめにも今日は、天下の御大老たる井伊掃部頭いいかものかみさ

様が、御登城の途中、浪士とものために討たれて果てなされたのであるぞ。——將軍家

をはじめ天下万民、いかなることになり行くかと、世を挙げて憂い愁かなしみ、御国の悩みを

身の悩みとしておる際に——青楼せいろうで歌を謡うとは何事だ。また密ひそかに客を揚げて、かよ

うな時とばかり、営利をむさぼる楼主の不謹慎はなおもってゆるし難い。追っつけ、楼主には後より糺明きゆうめいを申しつけるが取り敢ずあえ、その客をここへ出せ」と、喚くわめ。

楼主は、蒼あおくなつて、

(……誰じや一体)

やりてに囁くささやと、誰かが、

(八っさんで)

と、低声こゝえにいう。

船頭の八は、酔もさめ果てた顔つきで、やりてに引つ張られて出て来た。

「……汝おのれか」

と、役人達はいったが、たあいもない八の人態を見て、すこし拍子抜けした様子でもあった。

——すると、表梯子おもてばしの下の大土間へ、また一名の同心が入って来て、

「池田。そこにいるのか」

と、下からいう。

「才、何だ」

池田と呼ばれた同心が梯子の下へ答えると、

「今、深田橋のたもとの蕎麦屋で、酒を一合飲み、蕎麦を喰って擬宝珠の方面へ立ち去った一名の浪人者がいるという報らせだ。——すぐ来いっ」

そう聞くと、同心たちは、にわかに色めきを革めて、八は、楼主に預けおくといいのこして、

「そうかつ。——さては夕刻チラと見かけたあの胡散な男かも知れぬぞ」

一、^{いっせい}齊に梯子段を降り、そして争って外へ駈けて行つた。

四

後で、連れの八に、不実だと恨まれようがどうなろうが、巻ぞえを喰ってはたまらないと思つたのである。

権十は一人で裏口を探し、夢中で逃げ帰つて来た。もう河の中も、夜半^{よなか}だった。船止めでつかえた無数の船が河を埋めて眠りに落ちていた。権十は、醬油くさい自分の

伝馬船の中へかくれ込むと、すぐ陸へ架けてある渡り板を引き、苦の中でほっと人心地を呼びもどした。

「お松。……お松。……もう寝たのか」

さすがに、子に恥じながら、箱行燈へカチカチと灯を磨って、何気なく自分の蒲団を隅から引つ張り出した。

途端に、

「——あつ？」

権十は喚いた。

びっくりして、跳び退いた弾みに、苦の天井でひどく頭を打った。狭いので足はまた、お松の寝顔にけつまずき、お松も驚いて匆ね起きた。

そして、権十の驚いたものに、お松もびくツと顔色を変えるなり、

「怖いッ——」

と叫んで、父の体へしがみついたまま、俯ツ伏してしまった。

苦の隅に、じつと、身を屈めていた人間がある。若い侍なのだ。——勿論、権十が入ってくる前からここに隠れていたに違いないのだが、逃げ遅れたのか、燈火のつくのを待つ

ていたのか、今まで息をころして屈^{かが}んでいたものと思われる。

「……？」

驚きの余り、権十は眼を空虚^{うつろ}にして、唾^{つよ}みたいに、しばらくはただその侍を見つめていた。

泥まみれな脚絆^{きやはん}、草鞋^{わらじ}ばき、股立^{ももだち}を括^{くく}った袴^{はかま}は破れていて、点々と血らしいものがついている。年ばえはまだようやく二十三、四ぐらい。くるつとした純真な眼を持ち、何処かあどけないところさえある顔立ちだが、その顔にも泥土^{どろ}が芻^はね上がっていて、乱れた髪の毛がかり、総体に鬼気のある姿を、さらに嶮^{けわ}しい身構^{みくま}えに固くして、隼^{はやぶさ}が翼^はを収めているようにじつと隅へ身を寄せているのだった。

「だ、だれだつ？ ……おめえは」

権十は、渴^{かわ}いた声^{こえ}をはげまして、やつといった。

「——人の船へ、断りなしで、そ、そんな泥足のまま。……これでも苦^{とま}の内は人間の住んでいる世帯だぞ」

すると、姿にも似げなく——その侍は両手をつかえて、
「お宥^{ゆる}してください」

素直に、すぐ謝って、

「重々、済まぬこととは心得ていたが、一身の危急、つい前後を顧みている違いとまもなく、お船の内へ隠れ込んだ。——その上にも、寔まことに無理なお願ひであるが、どうか拙者をこのまかくまま匿かくまつて、霞ヶ浦かすみうらの常陸岸ひたちぎしか、鹿島かしまの辺まで便乗させてもらえまいかと、重ねていう。

権十は少し安心もし、氣も直して、

「それやあどみちつち途ちようし、銚子ちようしへ帰る空船からぶねだから、乗せて上げまいものでもないが——だが、この関宿せきやどには、河筋にも関所の柵さくがあるんですぜ。一体お前さんは、その河番所を通る手形を持つているんですか」

「この通り、手形は所持いたしておるが、あつたにしても、これは人に示すわけにはゆかぬし」

「へ。どういうわけで」

「実は今朝、江戸表の桜田門で、大老掃部頭たいろうかもんのかみの首級を挙げた浪士十七名の中に、自分も加盟して働いた一人なのだ」

「げっ、じゃあ……あなたは水戸の」

「拙者は海後かいご磋磯之介という者。首尾よく大老を討ち止めた上、その場から各 ちりぢりに落ちのびたが、早くも、幕吏の手は行く先々に伸び、ここまでは、ようやく逃げて来たが……もはや進退も谷きわまった。この上はわしを突き出すとも、否とも、その方の一存次第——」

権十おどろの愕きは、最初の驚きの比ではなかった。齒の根も、体も顫わなくばかりで、勿論、それに対して、否とも応とも、返辞などはできなかった。

五

大老が刺し殺された。

襲撃したのは水戸浪士の十七名で、その場で、割腹した者もあり、自首した者もあり、逃げ落ちた者もある——という。

何しろ江戸表は覆くつがえりそうな騷そうじょう擾だつたらしいが——そんな噂を途中で聞いても、萍うきくさぐらしの権十にとっては、陸おかの地震のようにしか考えられなかった。しがなやもめい鰐の船頭には、一国の宰相の死よりは、夕方の酒の榼ますめ目と、晨あしたの米の値のほうが、遙かに実際には強

くひびく。

——だが、今はもう他人事ひとごとではなかった。大老の死は、自分たち父娘おやこの苦とまの下へも、忽こつぜん然と、泥のような波を挙あげてきた。もし、この侍の頼みを拒こばめば、この侍は自分たちをただで措おくはずはないし、その乞こいを容れれば、関所で当然見つかるであらうし——
(どうしたものか?)

と、権十はまったく途方に暮れて、ただ恐怖の中に茫然としていた。
すると、お松が、

「——お父っさん。あの薬、何処へやつたえ。おととい、お父っさんが、荷揚げの時に摺すり剥むいたで、おらが深川で買ったあの貝殻かいがらぐすり薬さ」

側から不意にそういつて、辺りの抽斗ひきだしを搔かき廻まわしていた。
そしてすぐ、

「あつたよ」

というと、磋磯之介さきのすけの側へ寄つて、

「お侍さん、この傷薬をつけてあげよう。耳のうしろにも、手にも血がながれているでよ」
「ありがとう」

張りつめている気分を、ふと小娘の温情に和らげられて、磋磯之介は、急にがつくりしたようにいった。

お松は、指の先に薬をすくい取って、何のこだわりもなく、磋磯之介の襟をのぞきこんだ。掠り傷ではあったが、寒風にふかれて黒く乾いた血が、糊のように下の肌着まで硬ばらしていた。

「お松、待てよ」

それを見ると、権十も、迷っていた思慮を捨てて、ついいつてしまった。

「いきなり練薬などつけたって駄目だぞ。先に、酒か焼酎で傷口を洗っておな
くつちや」

船世帯の流し元から、権十は焼酎を持って来て、檻樓を裂いた。そして、低声をふるわ
せて、

「お松、おらは、陸のほうを見ているでな、早く手当をしてあげて、燈火を消しちまわね
えといかねえぞ」

といった。

苦の隙間から、権十は陸を睨んでいた。黒い人影が、雪明りの岸を時折通ってゆく。そ

れがみんな役人に見えてならなかった。隣の干鰯船^{ほしかぶね}へは、まだ八の帰って来た様子もない。

花菖蒲^{はなあやめ}

一

夜が明けると――

つかえていた芥^{ごみ}が堰^{せき}を切ったように、われがちに、河番所の柵^{さく}へ船が殺到した。

「喧^{やか}ましいっ」

「鎮^{しず}まれっ」

「いくら急^せいても、お検察^{あつた}めのすまぬうちは、通すこと成^ならんのだ。順番を待ちおろう」

河番所も、常よりは役人の手を殖^ふやし、江戸表から来た同心などは、素槍を持って中に交^まじっていた。戦時のような厳しさなのである。

「よしっ」

調べの済んだ船には、せきやどかわやくにん関宿河役人という判のすわった検札を渡し、

「次！——次っ——」

と、敏速に、手分けして、役人たちは飛び移ってくる。

ふなかんさつ「船鑑札を見せい」

と、権十の船へも、その二、三人が来るなりけんべい権柄にいった。

「へい」

権十の顔は硬ばっていた。

鑑札の船戸籍を見て、

「醬油船だな」

「へえ……左様で」

とま「苦を除れ」

いいながら、役人たちは、ずかずかと歩き廻り、自身でも、船板を上げたり苦を剥くめたり、厳しい眼を光らしていたが、

「娘。——その樽たるは何だ」

と、そのうちに、お松の姿を見つけた者が、お松の倚よりかかっている四斗樽を見つけて

訊ねた。

「エ？ …… あんだねえ」

お松は、樽に倚りかかつて、目^め筈^{はる}の中の野菜の皮を剥^むいていた。

「——退^どけつ」

「この樽かね」

「空樽か」

「味噌が入ってら」

「味噌樽。——其^そ方^ちどもは父子二人暮らしではないか。どうしてこんな大きな樽に入れるほど味噌が要るのか」

「ホホホホ。これはお私たちのたべる味噌じゃあねえにき。江戸のお客様に、正月頃、味噌漬を頼まれていたので、今度積んで行ったところがなよ、そのお客様の家が、神田とやらへ越^こしちまったというで、仕方なしに持つて帰^けえつて来たのだによ」

「ふム、味噌漬か」

いいながらその同心は、不意に素槍の穂^ほをしごいて、樽の横腹をそれで突き徹^とそうとした。

「あつ、何するのけ」

お松はびっくりして起つた。膝の上の目^め筈^{ざる}から里^{さと}芋^{いも}がころがった。

「中を調べるなら、蓋^{ふた}をあけてお見せするで、待つてくらつせえ。槍などで樽に穴^あを空^あけられたら、味噌が腐^すえてしまふでねえか」

お松は、あわてて樽を開けた。そして味噌の中に手を深く突き入れて、茄子^{なす}だの大根^{だいこん}だのを掴み出し、

「もつと、出すべかよ」

ニコニコしながらいった。

役人達も笑った。

「よしっ」

檢察済みの紙^か片^{みきれ}が、ひらつと彼女の足もとに舞つた――

二

雪が解けると、利根川は赤く濁り、水^{みづ}嵩^{かさ}も増して、幾日も浪は激していた。

「お父っさん、血つてえものは、洗つても洗つても、なかなか落ちねえもんらしいんだなあ」

潮来の出島に近い入江の深くに風を避け、真菰まこもの中に繫綱もやつていた醤油船はもう四日もここに泊つていた。

お松は今、乾いた洗濯物せんたくものをおろして、畳たたみ付けていたのである。磋磯之介さきのすけの肌着と、

小袖、そして袴はかまだった。

行々子よしきりが高く啼ないていた。権十の大漁着を借りて磋磯之介は、苫とまの蔭に丸っこくうずくまっていた。

「お松さん、相すまないな」

彼がいうと、

「海後さんたら、そんなに何遍も礼ばかりいうて、おら、返辞かえごがなくなるがな」

狭い船の中で、四日も暮しているうちに、お松はもう彼に馴なついて、友達あつかいにするのだった。

権十は、午ひるから陸おかへあがって行つたが、間もなく、酒を買って帰つて来た。

そして磋磯之介さきのすけに、

「旦那様、もうこの辺はだいぶ往来が楽になったようでございますよ」と、告げた。その晩、磋磯之介は、ここから常陸岸の玉造へ上陸する決心をしていたので、「そうか、それは有難い」

と、心からいった。

晩になると、薄暗い魚燈の下で、父娘は酒の支度をしてくれた。小やかな宴ではあるが別れの名残だった。権十が酒の相手をし、お松は、洗濯した袴の綻びを縫っていた。磋磯之介は涙がこぼれてたまらなかった。

漂泊の支那の詩人が歌った詩を思い出したりして、彼は、感傷的な思いに沈んでいた。

「海後さん、おら、お針は下手だから、よう縫えていねえがよ」

お松は、糸切歯に糸を噛んで、縫いおえた袴を出した。

身支度をして、厚く札をいつて、さて、岸へ上陸ろうとすると、あどけなくそれまで笑っていたお松が、急に、眼にうるみを持って、

「さようなら」

といったきり、暗い苦の下にかくれてしまった。

磋磯之介は、足を戻して、

「——お松っちゃん」

と呼んだ。

返辞をしてくれないので、彼は権十のそばへ戻って、

「金子^{きんす}は持ち合せていないし、何も礼につかわす物が無いが……これはわしの刀に付けて
 おる目貫^{めぬき}で、鉄地に花菖蒲^{はなあやめ}の象嵌彫^{ぞうがんぼり}、作銘^{さくめい}もないが、持ち馴れた品じや、かたみに
 上げるから納めておいてくれ」

「と、とんでもない」

権十は押し返したが、

「寸志だ」

いい捨てて、磋磯之介は、常陸岸^{ひたちぎし}の蕭々^{しょうしょう}と暗い風のそよぐ広原へ駈け去ってしまった。

——生きている！

こう自覚する自分の身が、思えばふしぎな気がしてならない。

同志と謀^{はか}つて、水戸から江戸へさして出かけて行く時には、この道を、二度と生きて通ろうなどとは思つてもみなかった。

（関^{せき}殿はどうしたろう？ 金子様や、鯉^{こい}淵^{ぶち}要^{かなめ}人、佐野竹之介殿なども？）

桜田のあの日の——同志の悽^{せい}慘^{さん}な顔つきが眼にうかぶ。

闇の中を歩いていても、海^{かい}後^ご磋^さ礫^{さき}之^の介^{のすけ}の眼には、未だに白い光りものがチラチラ見えてならない、あの日の吹雪^{ふぶき}の幻影である。同志の者と、井伊家の臣下とが、滅茶滅茶に斬りむすび合つた刃の幻影である——

「成功した」

若い彼の心臓は、いっばいな功名心と、報国心と、それに当って尽したという満足感で緊^はち切^きれそうになっていた。

この一挙で、幕府の方針は一変し、国内は明るくなる。尊^{そん}王^{のう}攘^{じやう}夷^いを奉^{ほう}じる士気はさらにふるい、たとえ、一時は脱^{だつ}藩^{ぱん}の汚名をうけても、やがては藩侯へ赤誠もどくものと——彼の胸中には俯^{ふぎ}仰^{よう}して恥じる何ものもなかった。

けれど、水戸へ近づくと、その城下に残されている同志たちの家庭が眼にうかんで心が暗くなった。

良人に残されて孤屋こおくを守る妻や——父を慕って夜泣きする頑是がんぜない子達や——年老いて子に先立たれてゆく親達や——

「ああ、これで、世の中がよくならなかったら……」

彼は、桜田で散らした自分たちの血しおよりも、その大きな犠牲を考えて、悲憤の醒さめきらない眼を、青い星に向けて呟いた。

幾夜の旅の後に、彼は、笠間峠かさまとうげのいただきから、なつかしい城下の灯を遠く見ていた。しかし、その城下へは、元より一步も入れない身だった。

唯、お城の方角ちまたへ向って、額ぬかずいてそこを去った。

行く先々で、巷ちまたの風聞が耳に入る。——それに依って、彼は、自分と行動を共にした十七名のほとんどが、事変の直後、自刃したり、捕われたりしてしまって今なお星の下もとに生きているのは、自分の他ほかに二、三名しか残っていないことも知った。

毛虫桜

一

血縁の家である、それではなくてさえ、世間は疑いの眼を向けたがっているのだから——と、くめのすけ 糸之介はいう。

「そなたも、他へ嫁がなければならぬ身だし、嫁入りの障りになる。……お互いのためを思つて、もう足踏みしてくれるな」

言葉の意味は厳しいが、きび 糸之介の思い遣りは温かだった。お那珂の顔を見ると、懇ろにさとし こう諭すのだった。

お那珂は泣いてばかりいた。

そして、叱られても、叱られても、この家に来ずにいられなかった。

この家というのは、烏山の町の山倚りにある三島神社の社家だった。糸之介はその神主で、海後さきのすけ 磯之介の実兄であつた。

「おばさま、こんな物、つまらない物ですけど、お子様に上げて下さいませ」

今夜も、夕方からお那珂は話しに来ていた。主人に顔を見せるとまたいわれると思つて

か、菓子や煮物など持って来ては、糸之介の妻だの、子供たちの中に交^まじって遊んでいるのだった。

お那珂は、町の木綿問屋の二番目娘だった。主人の弟の磋磯^{さきのすけ}之介に前から心を寄せていたことを、糸之介の妻はよく知っていた。

娘時代のそうした気持がわかるだけに、妻女のおかやには、

「お那珂さん、御舎弟の磋磯^{さきのすけ}之介様が、万が一にでも、ここへおいでになったら、きっと会わせて上げますから、それまでは、主人のいうように、あまりここへは来ない方がよい」
「ざいますよ」

その程度にしか、いえないのである。

「ええ……」

お那珂は、すぐ涙ぐみ、

「おば様、わたし、どうしたらいいでしょうね」

「どうしたらとは？」

「縁談があるんですの」

「結構じゃありませんか。——たとえば生きてお還^{かえ}りになるようなことがあっても、磋磯^{さきのすけ}之

介は、公儀のお尋ね人ですからね」

「けれど、どうしても、嫌なんですよ」

「誰方ですか。縁談の先は」

「繭仲買の専右衛門ですって」

「ま。——あの人？」

奥の書齋から咳声がきこえたと思うと、

「おかや、おかや」

「——はい」

彼女は、主人の書齋へ入った。そして、戻って来ると、声を密めた。

「お那珂さん、また主人が、あなたの声を聞いて、少し機嫌をわるくしているんですが」

「すみません。もう帰ります」

「気を悪くしないで下さい。良人でも、貴女の将来を思っているんですから」

「おばさま、分っておりますわ」

「今ちよつと、専右衛門さんとの縁談のことを耳に入れたら、あの男なら生涯を託しても慥かだろうといっていました。烏山の町では、堅いというので、いちばん信用のある人だ

し、商才もあるから、いい縁談だ。おまえからもすすめて上げろといわれましたけれど、こればかりはね」

「……もう当分伺いません。おばさま、さようなら」

「お提燈ちようちんを持っていらつしやいな」

「馴なれている道ですから」

お那珂なは、考え込みながら、帰る跣音まで気がねして、そつと、社家の裏口から出て行った。

裏木戸で、入れちがいに、米の袋を担になった糠ぬかだらけの男とすれちがった。穀屋こくやの若い者だった。

「今晚は——」

「こんばんは」

穀屋は、台所へ入って行き、お那珂は黙々と、足許あしもとの闇を見つめながら外へ歩いた。

桜並木につつまれた神社の石段は真つ暗だった。

一段一段、お那珂は、考えこみながら、重い足を落して行つた。

(……どうしたつて、添われないものを)

自分の愚かしさが分りながら、その愚かな執着が捨てられないのであつた。

すると、後ろから、

「お嬢さん、提ちようちん灯とうをお持ちなさらないで危のうございますよ。町までお送りいたしますよう」

と、先刻の穀屋こくやの若い者が、米の袋を空にして追いついて来た。

「ありがとう。今夜は星も見えないんだね」

「そろそろ五月さつき闇やみですから」

「社家しゃけ様のお宅では、以前からおまえの家でお米を取っているんですか」

「へえ、だいぶ永年御ひいきになっていますが——お嬢さん……」と、穀屋は声をひそめて、

「誰かこのごろ、あのお宅には、お客様でも滞在しておいでですか」

「どうして」

「少し……その、このごろ、お米のお入用が違うんですが」

「そういえば、何だか、以前よりもよけいに、あのお家でおまえにも会うね」

「そうなんです。——ここ四、五年もずっと、幾日目には一斗と、ちゃんとお入用が極つていたのに、近ごろはそれが早く失くなって、まだあるはずだと思っていると、いつも御催促をうけますんでね」

「……？」

お那珂^なは、ふいに足を止めた。その足の先に、妖^{あや}しい光を帯びた毛虫が二、三匹うごいている。提燈の明りに揺らいで見える彼女の顔いろは、葉桜の青葉のように変っていて、呼吸^{いき}もしていないかのように見えた。

「……変ですぜ」

穀屋^{こくや}の若い者は、そうつけ加えたが、ひよいと、お那珂の顔を見て、

「いいえ、べつに手前どもじゃ、多く取つていただいた方が、有難いんですがね。へへへへ」

と、笑いに紛^{まぎ}らせた。

町に近づくと、穀屋は、お先にといって急いで行ってしまった。お那珂は、急にぽろぽ

ろ涙をながして、

「ひどい！」

と、呟いた。

「——そうだ、きつと磋礧^{さきのすけ}之介さんは、社家の奥に、隠れているにちがいないのだ。桜田からも逃げたという世間の噂。……わたしに会ったら、世間に知れるか、密告でもするかと思つて」

今までは、好意に聞いていた糸^{くめのすけ}之介夫婦の言葉も、そう気づいてみると、皆自分を拒^{こば}む針のように思いなされて来た。

「……ばかばかしい、何でわたしは今まで」

お那珂は、夜風の暗い空を振り向いて、口惜しげに、立ち竦^{たすく}んだ。

三

春^{はるまゆ}繭の生糸を横浜へ持つて行つて、専^{せんえもん}右衛門は、莫大な金を懐^{ふところ}中にして歸つて来たに違いないと、烏山で評判されていた。

「馬鹿いうなよ」

専右衛門は、自分にたかりたがっている町の者の顔を見ると、唾つばするようにいった。

「それやあ、秋繭あきまゆの時やあよかったさあ。だが、いつも柳の下に鱒どじょうはいねえってやつだ。

百貫目も引ひつ担かついで行つた荷が、今度あ二束三文どころか、何処いじんの異人めも、値もつけやがらねえんだ。——なぜかつて？ 知れたことよ、井伊掃部頭いいかもんのかみさま様が殺されたじゃあねえ

か。港を開いて、どしどし貿易をやらせろという御方針でいらつした大老様の首が飛んだんだ。生糸いとなんざ一遍にガラ落ちよ。折角、根を生はやしかけた神奈川の異人館だつて、今にも国へ引揚げることにもなりやあしねえかと、浮き腰でいるんだから、一文だつて、商談なんざ成り立つわけがねえや」

成程と、聞く者は、それに感心する知識しかなかった。

だが、専右衛門は、そんな不景気な面相ではなかった。小判を持っていた。外国ドルの弗も持つていて、茶屋女などに見せびらかした。

きょうも、町の料理屋で、昼遊びしていると、

「綿屋の御主人が、お目にかかりたいといって、訪ねて、おいでになりましたが」
女中の取次を、鷹揚に、

「あ、来たのか。向うへ通しておいてくんな」

行ってみると、綿問屋の河西屋伝兵衛が、娘のお那珂を連れて、待っていた。

「専右衛門さん。こんな場所へお訪ねして来ては、野暮ですが、いつかのお話の縁談のこ
と、きょう娘が、御返辞したいというので連れて来ましたが」

いい難そうに伝兵衛がいうと、お那珂は、畳へ手をついて、何かいうつもりなのが、そ
のまま、泣きじやくつて、俯つ伏してしまった。

「はてね」

専右衛門は、嘯いて、

「その御返事なら、もう、お那珂さんからきつい肘鉄砲をいただいて、私も、諦めてし
まっているところだが……」

「堪忍して下さい」

咽びながら、お那珂がいった。

「あたしの、考えちがいでした。浅慮なのが分りましたから、父に話したら、親の口か
らはもういえぬ。お詫びするなら、自分でいえといわれたので」

「ふうむ……じゃあ考え直したというんだね」

「左様でございます」

「——じゃあ俺も、考え直してみよう。だけれと、お尋ねの人の神主の弟などを胸の中にいつまでも慕っていられちやあ、お智むちさんがかなわないが」

「わたくし……そんな気もちを持たないという証拠しやうこをあなたにお見せします」

「証拠しやうこを。おもしろい、どう見せてくれる」

「あなたが、縁談の繕よをもどして——そして、虫のいいお願いですけど、最初の約束のように、父の苦境を救って下さると仰おほつしやれば」

「よし」

専右衛門は、手を鳴らした。

そして、自分の手代を呼んで耳打ちすると、すぐ手代が金を持って来た。少ない額たかではなかった。

「じゃあ、この場で五百金、結納ゆいのうとして、お父さんに上げておこう」

綿屋の伝兵衛の苦境は、町でも知らない者のないほどだった。人の知っている以上、懐ふ中とこはなおさら苦しかったのである。娘の体で救われる金をそこに見ると、伝兵衛は、面おもて目なげにさしうつ向いた。

四

「御新造さま。濟まないことをいたしました。どうか、勘弁かんべんして下さいまし」

米は持たないで不意に來た穀屋の若い者が、泣かんばかりな顔をしておかやに詫びるのであつた。

「どうしたんですか、私には少しもわけが分らないが」

「実は、この間の晩、綿屋のお嬢さんと、歸り途でいっしょになった時、手前がついつまらなすべいことを、口にすべにすべらせたので」

「何を……」

「その……何とも……申し難にくいことですが、このごろ、社家様のお宅では、滞留客でもいらつしやるのか、お米の御用が、前よりもよけいになったと」

おかやは、さつと、顔いろを変えたが、すぐホホ笑んで、

「ああ、この間あるじうちは、主人の詩歌のお友達が、行脚あんぎやの途中、しばらく泊っていたからですよ」

「手前も、多分、そんなことだろうと存じて、何気なくしゃべったんですが、それをお那珂様が、どうおとりなすったのか、代官所へ密告なすったんで」

「げッ……？ ……ほんとですか」

「ちらと、耳にしたんで、手前も仰天してしまい、せめてものお詫びにと、お知らせに飛んで来ました」

「そうですか。役人衆がお調べに来て下されば、世間の疑いが晴れて、かえって、宅の方では結構です。けれど、御親切のほどは、よく主人にも伝えておきますよ」

穀屋の若いものが、帰って行くと、おかやは、慌^{あわ}ただしく良人の部屋へ来て、耳打ちした。

糸之介は、嘆息して、

「あだから女には、心をゆるせない。だが、磋^{さき}磯^{のすけ}之介には聞かせぬがよいぞ」

いいふくめて、すぐ、

「戸外^{そと}を見張っておれ」

「は、はい」

おかやが起って行くと、糸之介は、奥の八畳に入って行った。

神官の家には何処にもある「神座^{かみざ}」といつて、平常^{ふだん}も人を入れない一室だった。磋磯^{さくま}之介はもう二ヶ月も前から、そこに匿^{かくま}われていた。

「――逃げろ、足がついた」

と唐突な兄の言葉に、彼は、はつとしたが、平常から覚悟していたことだったので、

「いや、分つたら、自首して出ます」

といった。

「ばかをいえ。おまえは、国士^{こくし}をもつて任じている人間じゃないか。まだ、お国のためにすることはたくさんある。生きるだけ生きて、尽せるだけお国のために尽して死ね」

「――でも、他の同志は皆、自刃^{じじん}したり自首したようです。拙者一人が、生き伸びているのも心苦しく思われてなりません」

「そんなことはない。あの人達を、裏切つて生きているならべつなこと、おまえもともに、なすことをなし、もう盟約は終つたのだ。これからは、おまえ個人が、生きがいのある道を見出し、なお、国事のためにすこしでも多く尽して行けば、立派に士道は立つというものだ。……今、親切に教えてくれた者があつて、すぐにも、捕手^{とりて}が来るかも知れぬのだ。とにかく、一時、この神社の裏山へ登つて、谷間へでも何処へでも隠れておれ。そのうち

に、余^{ほとぼり}燼^さが冷めるのを待つて、遠国へ奔^{はし}るがよい」

血をわけた人の眸には真実の涙が光っていた。——けれど磋磯之介の胸にはここを去る
となると、急に、お那珂の姿が思い出された。

（後生ですから、一度そつと、会わせてください）

と、いつか嫂^{あによめ}にも訴えたが、そのまま会えずにいたのだった。けれど、兄の今のことば
と、真情に潤^{うる}んでいる眸を見ては、そんなことは勿論、曖^{おくび}にもいえなかった。

山と町

一

「山の神主さんはこのごろ、少し気が狂^ふれているそうなの」

「どうして」

「時々、裏山へひよこひよこ登って行つちやあ、大谷原や蛇^{じゃ}ヶ池の辺で、たんだ独りぼつ
ちで、大^{でけ}え声出して喚^{わめ}いているってえこつたもの」

「何を喚わめいているのか」

「詩吟ていうのか、唐人の難しい詩を歌ったり、そうかと思うと、子守歌を謡うたって歩いていたりすることがあるというぜ。——そんなところを、山の木挽こびきが、二、三度見かけたという話だ」

「かあいそうにな」

「いつぞや、代官所の衆が、捕手を連れて、ひどい家探しをやったそうだな。何でもその時、役人を相手に、えらい争いさかいをやったというから、そんなことで、逆上したんじやあるめえか」

夏が近い——

烏山の町の者や、桑摘くわつみの人々の間では、よくそんな噂が出た。

社家の前には、あれからずっと、見張が付いていたが、六月に入ると、その見張もいなくなつた。

主の衆あるじ之介くめのすけは、きょうも山へ登つて行つた。

今日は、瓢ふくべを提ひげ、大きな弁当を腰に結ゆいつけていた。
檜ひのき沢さわを通ると、沢で材木を挽こいていた木挽こびきたちが、

「ほら、また、通るぜ」と、囁いて笑った。

「えいッ——」

と、糸之介は持つている杖で梢を払っていた。そして、沢を覗いて、

「者ども！ 者ども！ そこへ今、天狗が落ちて行つたぞつ。わしが斬り落したのだ、歸りに持つてゆくから、縛つて置け」

と、呶鳴った。

「あはははは」

と、沢の木挽たちは、腹をかかえて、おかしがった。

剣ハ雲根ヲ断ッテ

殺氣横タウ

鉄花 鏽 澁 シテ

蘇花生ズ——

もう詩吟の声は、峰の上だった。

炭焼や、木樵や、見知らぬ者に会つても、糸之介はすぐお道化た。山中なので、怖がつてみんな逃げ出してしまふ。

「やおれ、待てつ」

と、追われて胆きもを縮めた者もあつた。

大谷原の辺は、滅多めったに人も通らなかつた。昼間の月が、草の花の上にぼんやり見えた。

「美味うまい」

ふくべ

瓢ふくべの酒を立ち飲みしながら、彼は、黄昏たそがれるのも忘れたように、山の奥へ奥へと彷徨さまよつ

ていた。

そして時々、発作的ほっさな高声で、詩を吟じてゆくと、

「兄上うへつ」

と、樹蔭で呼ぶ者があつた。——いやその詩吟に対しての答えだつた。

辺りを見廻して、兄弟は抱き合つた。兄の桑之介が、狂気を装って、詩や歌を謡うたつて彷徨さまよっているのは、山にかくれている弟に、自分の訪れを告げて呼び出す策だつたのである。

「御辛ご勞をかけまする」

磋磯さきのすけ之介は、涙なしで、兄の姿を見られなかつた。

「いつぞや運んでいただいた食物が、まだ残っておりましたのに」

「いや、今日は、瓢ふくべに酒を持って来た」

「酒まで運んでいただいてはすみません」

「別れに飲もうと思つてな」

兄は、沁々しみじみといった。

「町も街道も、だいぶ詮議は下火になつたらしく見える。もうこの辺が、他国へ身を抜く時機だと思ふ。路銀も少しばかり持つて来た。肌着と脚絆きやはんなども包んで来た。今夜あたり、山を降りて街道を奔れはし」

「じゃあもう会えませんか」

「世の中でも変ればまた」

「その世の中も、吾々が考えていたようには変りもせず進みもしないようですが」

「自分の力を過信するなよ。これからは、身を大事にしてくれ……。さ、何処で飲もうか」

「同じ酒を酌くむなら、どこか、広潤な天地へ出て酌みましよう。湿々じめじめした谷間にかくれていたの、暗い所は閉口ですから」

「よからう」

峰の中腹へ出て、山芝のうえに兄弟は坐つた。——眼の下に、ポチと灯が一つ見えた。

「ああ、家が見える」

礎磯之介は、思わず伸び上がって、その灯の下にいるあによめ嫂や小さいおい甥やめい姪たちのまどい団欒を眼に描いた。

二

「酔いました——兄上」

礎磯之介は、腕を伸ばし、子供のように星を見つめた。

「いいなあ、やっぱり生きているというのはいいいなあ。……死んだものはつまらない。死んだ者にもう世の中を動かす力はない。だが、生きているおれにはまだある」

「弟。……これから先は、くれぐれも、身を守って、迂濶うかつなことをしてくれるなよ。——

おまえの今の眩きの通りだ。これから先の何十年は、余生だと思って楽しんでくれ」

「愛護いたします」

心から頭を下げて——ふと、彼方のひろい闇の底に見える無数の灯に眼を瞠みはった。

「あれ、何でしょう、兄上」

「烏山の町の灯だよ」

「それは分っています、何処の辻の辺になるか、ひどく、提燈の灯らしい光が、かたまつて動いています……」

「うム……成程」

「捕手だつ」

愕然と、起ちかけると、弟の腕を抑えて、糸之介は、静かにいった。

「ちがう……。ま、坐れ」

「自分の身を怖れて起つものではありません、もしやお留守を襲われて、お姉上や子達が代官所の者に手荒な目にでも遭つては」

「ちがうから心配はない。あの物々しい提燈ちようちんの列は、婚禮だよ」

「ア……何だ、町の婚禮ですか」

「どうせ、今宵かぎり、この国の人とも山河とも訣別わかれてゆくおまえだから、知らないものならいうまいと思つたが、気づいたからは審つづに話そう。あの灯はた、お那珂なかさんが、糸仲買の専右衛門に、嫁に娶もらわれてゆく仰山な明りだよ」

「……………」

磋磯之介は茫然としながら、兄の話すことを聞いていた。自分を密告したものが、自分

の一番信じていたお那珂であつたと知ると、彼は何か世の中が信じられない気がして来た。

開化の鈍人

一

「おい、旗岡巡查」

「はあ」

「はあじやないぞ貴公。人民の保護にあたる重務にある警察屯所の巡查が、日向で犬の蚤なんぞ取つとるやつがあるか。——一等巡查殿が、あちらで探しとるじゃないか」

「はあ、そうですか」

小使室の裏から、旗岡巡查はのっそり立つて行つた。非番巡查は、他で昼寝している者もある。彼もその非番組だったが、いい訳もなかった。

蟬の声が、低い西洋館をつつんでいた。茨城県の結城警察屯所の時計は、ちようど一

時半をさしている。

明治九年の真夏だった。

「お呼びでありますか」

旗岡巡査が立つと、何か、書類をめくっていた石田一等巡査が、

「貴公、去年まで東京警視庁に勤務しとったのじゃね」

と、^{たず}訊ねた。

「左様であります」

「東京におったんなら、横浜の地理も少しは知つとろうが」

「横浜には、勤務したことはありませんが、度々、出張はいたしました」

「そうか。——実は所内には、東京も横浜も知らん者ばかりじゃで、貴公に、横浜へ出張してもらいたい用件があるんじゃないかね。すぐ出発できるか」

「はあ、妻子も何もない身体でありますから、御命令とあれば、これからでも出立いたしますが」

「それでは、この男と一緒に行ってください。旅費はもう会計から出ておるし、事件の内容なども、この男から詳細に聞き取って——」

すぐ辞令を渡された。

石田一等巡査の後ろの窓際に、双^{ふた}子^こ縞^{しま}の单^{ひとえ}衣^{もの}物に白いシャツを着た富山の売薬会社
の行商人みたいなのが腰かけていたが、

「こういう者です」

と、名刺を出した。

水戸警察屯^{とんしよ}所^{たなべ}刑事・田辺劍三郎

としてあつた。

旗岡巡査も、あわててポケットを探りながら、懐かしそうに、

「水戸ですか」

と、田辺劍三郎の顔を見た。

「そうです。あんたも水戸の御出身で」

「いや、違います。拙者は、東京府士族の——」

と、断りながら、旗岡剛藏^{ごうぞう}という名刺をあわててさし出した。

黒羅紗くろろしゃの服が支給されて、秋風に海岸通りの夜が少し肌寒く覚えるころまで、旗岡巡

査と田辺劍三郎刑事は、出張先の横浜にいた。

櫓かしぼうの棒を持って、旗岡巡査は、毎日毎晩居留地や海岸通りを、漠然ばくぜんとあるいていた。

まったく漠然と——であった。

警察屯所から命令されて来た犯人の顔を、直接見て知っているのは、田辺刑事だけで、横浜はまの警察屯所にも一人もいなかったからである。

茨城県の百姓の出で、しばらく大洗にもいたことのあるという博徒なのだ。それが、この開港場へ潜りこんで、盛んに内外人のあいだで詐欺賭博さぎとばくをやっているのであったが、出入りに巧妙な変装でもして歩くのか、首魁しゅかいの当人をどうしても捕縛することができないので、田辺刑事が招致されたのであった。

けれど、本人の顔を見知っている田辺刑事にも、まだその男を突き止めることができなかった。

——背何尺何寸、筋骨脂肪質しぼう、足袋何文たび、顔うす黒い質、あばたあり、右の眉すこし薄し……などという緻密ちみつな人相書を授けられて、

「見つけたらすぐ、山手警察屯所の出張室へ知らせるように」

と、田辺刑事からいい渡されて、毎日歩いている旗岡巡查にも、一体、何しに来ているのか分らない気がして来た。

けれど、旗岡は、それに飽きもしなかった。飽きない理由は、初めから少しも功名心だとか、競争心だとか、そんな興奮は持たないからであつた。

他県の刑事が出張して来たとなると、俄然山手屯所の巡查や探偵たちは、眼いろを変えて、それに熱した。当然、田辺剣三郎刑事も、挑戦されたような感じで、たった一人の味方である旗岡巡查を励まして、

「もし吾輩ら二人の手で、犯人をあげたら、足下にも、十分の賞典があるように、屯所へ報告するからな」

と鞭べんたつ撻した。

「はあ、はあ」

服従はしているに違いない返辞だが、旗岡巡查の顔には、ちつとも感激も興奮もわいて見えて来ないのである。

「つまらない奴を付けてよこしたものだ」

と田辺は結城警察屯所ゆうき とんしよの人選を恨んだ。

「およそ、どこの屯所にも、鈍物どんぶつはいるが、あんなのは、見たこともない。何を話し合
つてみても、曖昧あいまいな生返辞ばかりしているし、酒を飲み合つても、あの通りだ。昔ばな
し一つした例ためしが無い。いったい今年幾歳いくつだろう？」

時々、焦々じりじりして、怒鳴りつけることもあったりしたが、そういう時でも、

「はあ。……御尤ごもつともです。……はあ、気をつけます」

それくらいな感動を出すのが、精々などころであつた。

三

生糸検査所、銀行、美術品店、商館——わずか十年前には見られなかった煉瓦造りの町
に、砂糖やメリケン粉を積んだ幌馬車ほろばしやの馬が、鳴る鞭むちの下に、黄色い埃ほこりをあげて奔馳ほんち
してゆく。

「あぶねえつ。気をつけろ、巡査のくせに」

砂糖馬車の馬丁にどなられて、旗岡巡査はあわてて横っ飛びに交わした。

——いつも、何か考えごとをしながら歩いているらしいのである。

屋台店で、大福餅を焼いていた親爺おやじが、じつと彼の顔を見ていたが、

「……あつ、もしつ」

と追いかけて来ていきなりいった。

「旦那あ、もしや水戸の海後様の御次男じゃございませんか」

「……あに！ あんだと？」

「そうだ！ そうに違いない。——旦那、お見忘れでございますか。てまえは小石川の水戸様のお屋敷の近くに住んでいた蕎麦屋そばやの亭主でございますよ」

「……何よういつとるか、おまえは」

「お屋敷の旦那方にやあ、始終、御鼻ごひいき眞にあずかつていたんで、未だに誰方どなたのことも時々思い出しているんで。——へい、旦那もたしか——そのころはまだお若かったが、蓮田はすだ様や関様などと、四、五度もおいで下すつたはずでございます。……ところが、それから間もなく、桜田の騒動じゃございませんか、瓦版を買ってみると、よく冗しょうだん戯ごばかりいつていらした佐野竹之介様だとか、お気さくな黒沢忠三郎様だとか、お馴じみのお方の名が何人も見えるんで、瓦版を仏壇に上げて拝んだものでございます。……その中に、忘れも

しねえ、海後磋磯之介と、旦那の名も、十七名のうちに、立派に載っていたと思つたが、どうして今日まで御無事に……」

「これつ、おい、何をいつちよるか、何を……」

旗岡巡査は、まるで、持つてゐる棒みたいな表情で、

「わしには、何のことか、わけが分らんが……」

「……へえ？　そうでしょうか」

「人違いじゃろ」

「でも……？　……おかしいなあ。見れば見るほど似ていらつしやるが」

「大福餅だいふく一つくれんか、そんなことより」

「へい。こちらへお掛けなすつて」

と親爺は番茶を注いで、

「旦那、あつしも江戸の人間ですぜ。——いつて悪いことなら死んだつて、口を割りやあしません。……ほんとに海後磋磯之介様じゃねえですか」

「ちがう、ちがう」

金を置くと、大福餅だいふくの粉をはたきながら、すぐ黙々と歩き出した。

二十歩ほど過ぎてから、旗岡巡查は振り向いて呟いた。

「おそろしいものだ。まだ、わしの顔を覚えている人間がいるとみえる」

四

自分でさえもう他人の名のような氣のしている海後^{さきのすけ}磋磯之介という姓名なのだ。それをいきなり今日のように、

（旦那は、桜田の）

と、ずばといいあてられたような例は、^{ためし}かつてなかった。

なぜならば世間の^{おおよっぱ}大雑把な記憶では、桜田門の十七浪士は、すべてもう死んでいるものとしてあるからだった。

それにまた、磋磯之介は、^{からすやま}烏山を去ってから、越後に隠れ、後にまた、常州の^{みなと}湊の戦乱に参加して、ほとんど、世人の思い出しそうな所には、一日も身を置いていなかったせいもある。

明治になってから以後は、旗岡剛蔵と変名して、東京警視庁の巡查を拝命し、自分が桜

田事変に加わっていた一浪士であるなどという事は、おくびに、人に語った例がない。

——しかし、桜田の残党がまだ一、二名どこかに生きているはずという事を、確信している方面もあった。それは、ひこね彦根の士族たちだった。

維新後——大老の理想だったという開港貿易の隆盛を見ると、井伊家の旧臣たちの間では、早くも、大老を開国の先覚者とし、その死をけんしょう顕彰して汚名を雪そそごうとする銅像の建設運動が始まっているほどだった。

水戸を、骨髓にうづら怨んでいるその人々のあいだに、桜田事変の生存者があると知られている以上、当然——海後磋磯之介の旗岡巡査は、絶えず、背後うしろからある者に脅おびかさねずにいられなかった。

生命の危険さを感じられた。不審な将士に、狙つけ廻まわされて、刃を擬ぎせられた事もあった。だがしかし、旗岡巡査の無感激や無表情や、また、偏屈へんくつなような性格は、そういう恐怖から来たものではなく、日々に見ている社会の眩まばゆい変遷へんせんが、自ら彼を懷疑の唾にしてしまったといつてよいのである。

東京でも見た。

この横浜でも彼は見ている。

金モールを載せて轆轤れきろくと帝都を駛はしる貴顕大官の馬車や、開港場の黄金時代に乗って、大廈たいかこうろう高楼に豪杯を挙げてゐる無数の成り上がり者をながめて——一体、こういう人間を作るために、維新は幕末の永い間を、あんなに幾多の尊い人血をながしたのだろうか。桜田の事変は行われたのだろうか。これが、地下に白骨となつてゐる多くの志士たちの求めていた理想の社会だつたらうか。

旗岡巡查は、分らなくなるのである。

わからうとすれば、頭脳あたまが悪くなつてしまふ氣がした。いや、生きていられなくなつて来る。

修養のように、努めて彼は今の性格をこしらへ上げたのかも分らない。ぼんやりが幸福なのだ。鈍中の鈍となつて、ちくりとでも、真実に眼が醒さめないことを祈つてゐるのだ。巡查は将まさに、彼のためにあつてくれるような職務でもあつた。

午後六時。

規定どおりに、彼は山手屯所とんしよの出張室へ歸つて来た。

そして、何気なく、自分の机の抽斗ひきだしを開けると、罫紙けいしに走り書で、

居留地十四番館

赤い異人屋敷

コック部屋の裏門

深更まで至急監視の事

聯絡、後よりとる。(田)

田辺の命令が眼を刺した。

妖鬼燈
ようきとう

一

海岸から一側裏の通りだったその青い街燈は、よく見ると、波の音に時折身震いをしていた。

示令をうけた異人館は、四つ角だった。コック部屋と思える燈火の映っている裏門から、約二十間ほど離れて、旗岡巡査は立っていた。

港の船から、一時間おきに、鐘が聞えてくる。

「もう十一時だ」

と、思う。

約五時間の間、旗岡巡査は、見張っている門から何者の出這入りも見なかった。しかし、何らの惑いも落胆も抱かなかった。期待を持たない対象には惑いの生じようも落胆のしようもないのである。

「今に、田辺刑事から、何とか聯絡してくるだろう」

それだけを待つていた。

ただ、足は棒と違う。

さすがの旗岡巡査も、そこらの短い距離の間を、所在なげに散歩し出す時は足の痺れを思い出した時であろう。

——と。

まるで一枚の半^{ハンカチ}巾でも飛んで来るように、白い前掛をした女が彼方から走って来た。ちようにど海から霧が上^あ陸^がつて来て、街燈の灯まで二重になって見えるように往来が煙^けつ^づていた。

「ここへ来るのかな？」

旗岡巡査は、その女の影を認めるとすぐ、異人屋敷の雑用婦人^{あまさん}と見当をつけていた。

「——あッ、巡査^{おまわり}さんですね」

近づくなり、女は、打^ぶつかるように旗岡巡査の側へ来て、その腕へしがみついた。そして、何か訴えかけたが、肩ばかりが波を打って、

「た、たい変なんですつ。……す、すぐ来て下さい。すぐ！」

半分泣いている声だった。

「どうかしたんかね？」

「だ、だん那様が、殺されました。わたくしの主人に、短銃^{ピストル}で……短銃で……」

「人殺しがあつたんか」

「——ですから、大急ぎで来て下さい。早く来ないと、犯人も、逃げるか、死ぬかしてしましますから」

「困ったなあ。……わしはここを動けない事になつとるんだが」

「何ですつて。人殺しがあつたと訴えているのに、巡査^{おまわり}さんが、来られないんですか」

「わたしは他県から来とるんだしなあ。それに、任務があるし」

「そんな事いったつて、困りますよつ。来て下さい、来て下さい」

女は彼の腕を引つ張った。

その血相に励まされて、旗岡巡査も意を決めた。女に尾^ついて駈け出したのである。女は谷戸橋^{やとばし}を渡った。

高台の中腹にある西洋館だった。

「捕まえて下さい。犯人はまだ、あそこにいるに違いありません。カーテンに人影がさしたでしょう。……だけど、短銃^{ピストル}を持っていますから、それだけ気をつけて」

三階の窓を指さして、女はうつつにしゃべった。青いカーテンから透^すいている灯が、気のせいか、妖魔の燈火^{ともしび}のように見えた。

二

旗岡巡査は、その窓を仰ぎながら、おろおろしている雇い女へ、二つ三つ訊問した。

「おまえの主人が犯人なんじゃね」

「ええ……ええ……そうです」

「外国人じゃないのじゃろ」

「日本人です」

「何商か？」

「御婦人ですから、職業はありません」

「でも、その良人は」

「良人もおつとございません。お妾さんですから、——殺されたのは旦那さまです」

「ははあ、妾宅か」

「旦那さんは、弁天通りにお住居すまいのある生系の仲買さんです。御本宅へは、爺やを知らせにやりましたから、爺やと一緒に、奥さんが来るかも知れません」

「何でそんな惨事を起したのか、おまえ知らんのか」

「旦那さんが、手を切るといったからです」

「手を切るといったぐらいで、そんなことにもなるまいが」

「深いことは知りませんが、こちらのおくさんの方は元、神風楼しんぷうろうで花魁おいらんをしていたのを、旦那様が身うけして、ここへ囲ったのだと伺いました。——それだけならいいんですけれど、旦那さんは取引先の異人を連れて来ては、自分の姪めいだといって、ここのおくさんに、お女郎屋にいた時と同じことをしろといつて強しいるのです。——そして随分、異

人からお金を取ったんだそうです。その揚句、下駄でもはき捨てるように、切るの、出て行けのといったからでしょう」

「その犯人は。——名は何ていうのかね」

「そこに標札が出ております」

「うむ、成程。……木島松子というのだな」

角燈を翳して、それを見ている後ろへ、人力車の輪が砂利を嚙んで軋り込んで来た。

「——アッ、御本宅の奥様っ」

俣くるまから降りる婦人のすがたを見ると、女中はエプロンを顔に押し当てて泣き出した。そして、自分が犯罪者でもあるかのように、

「申し訳ございません。……旦那様が……あんなことになって」

と、うわずって詫わび言ごとを叫んだ。

俣から降りた婦人は髪を夜会に結い、病人のように青白い皮膚をして、見るからに弱々しく思われた。

「仕方がございません……良人にも、そんな目に遭う原因があったのですから」

途々、覚悟をしていたものか、眼に涙も持っていなかった。良人の兇死きょうしに駈けつけて

来たような狼狽は少しもなかった。

「警察の方はまだ？ ……」

「いえ、来ていらつしやいます」

女中は、旗岡巡査の影を指さした。——と、気がついて、夫人は前へ歩いて来た。そして慇懃に、

「お手数を煩わせまして、何とも、何とも、恐れ入ります」

と、いった。

「……………」

旗岡巡査は、何とも答えなかった。夫人が俥の蹴込みからおりる姿をちらと見た刹那から旗岡巡査は何故か化石したようにその位置に突つ立っていたのである。そして夫人の挨拶に対して、顔さえ横へ反^{そむ}向けていた。

夫人は重ねて——

「わたくしが、生糸商の木村専右衛門の家内の那珂子でございますが」

いいながら、何気なく、巡査の胸から横顔を仰ぎ上げた。——途端に、弾^{はじ}かれたように眸^{ひとみ}をみはって、

「あつ、貴方は！」

と、絶叫して、蹠めきかけた。

「奥様」

女中は驚いて、後ろから抱きささえた。彼女の顔は、死人のように、唇の血の気まで失っていた。

三

「どうなすつたのか」

旗岡巡查は冷やかにいった。——といつても、それが冷蔑とか復讐とかいう表現ではちつともなかった。ただいつもの彼のままであるに過ぎないのである。

「何か、人達えでもしたのじゃないかな。わしは巡查の旗岡剛蔵という者でありますぞ。

どれ、それじゃ三階へ行つて、犯人を捕縛して来るとするか」

扉を押して、ずかずかと屋内へ入って行つた。

彼の背が、ドアに隠れると同時に、爺やの訴えで、山手屯所の巡查の一隊が、ここへ

殺到して、騒然と、家の周囲をとり巻いた。

「気をつけい、犯人はピストルを所持しとるというから」

「誰か、三階へ、もう上がって行つたのか」

「旗岡巡査が先に来ておつたから、旗岡が上がって行つたろう」

「しばらく、様子を見ておれ」

「――裏口は、裏口は」

などと口だけで、騒^{さわ}めいているだけだつた。

――すると、二階のガラス窓が開いた。急に家の周囲に人声が聞えたので、そこまで、上がって行つた旗岡が、階段の窓から首を出して覗^{のぞ}き下ろしたのである。

彼の首を仰ぐと、下の巡査たちは、

「や、旗岡君。気をつけろよ、犯人はピストルを持つとるというぞ、ピストルを」
旗岡は頷^{うなず}いた。

「――いるのか、犯人は」

「おるらしいです」

「一人でよろしいか」

「梯子段が狭いから、大勢上がって来ても仕方がないようであります。もし、暴れて手に余るようだったら合図をしますから」

と答えると、旗岡巡査はすぐ首を引つ込めた。

ぎんランプ
銀洋燈

一

——約十分間も経った。

屋外に立っている巡査たちには、非常な長い時間に感じられた。

三階へ上がって行つた旗岡巡査が、今に何か呶鳴るか、悲鳴でもするか、悪くすれば短^ビ銃^{ストル}でも轟^{ごう}然^{ぜん}と鳴りはしまいか——と予想していたが、その十分間は、何の物音もしなかつた。

あかり
燈火の映^さしているカーテンの影すら揺れない。

「どうしたんだろう」

「呼んでみる」

いい出す者があつて、一人が遂に上へ向いて呶鳴った。

「旗岡っ。旗岡君っ——」

すると、燈火の洩れている窓からは遠いが、三階の一つの窓口から、

「おうい」

と、顔を出して、旗岡巡査が返辞した。

「や。……そこか、部屋がちがうぞ」

「内部から鍵を固くかけているので、今、あけるのに苦心をしておるのでして」

「じゃ、大勢して、ぶち壊^{こわ}して、押込もうか」

「いや——」手を振つて「鍵穴から覗いて見たところ、女は、血ばしつた眼つきをして、

短銃^{ピストル}をかたく掴んでおりますぞ。逆上している相手ですから侮^{あなど}ると怪我^{けが}人を生じるでし

よう。まあ、もう少し見ていてください」

「よかろう」

と一人が下でいった。するとまた一人が、

「鈍^{どん}さんには適任というものだ」

というと、緊張した中に、笑い声がクスクス流れた。

二度目に仰ぐと、もう旗岡巡査の顔は窓に見えなかった。黒々と佇^{たたず}んでいた巡査たちは、再び三階の燈火に異変が起るのを待ちながら、固唾^{かたず}を嚥^のんで、時計の秒針を胸に数えていた。

二

旗岡巡査は、暗い窓口から内へ顔を退^ひくと、跽音^{かたず}しずかに運んで、一室の扉^{ドア}を、そつと排^おした。

「……………」

開^あくのである。

鍵は、彼を入れないためにかけられてあつたのではなく、彼が、自分の身をそこへ隠して後、自分で内側からピンと卸^{おろ}してしまった物であつた。

床^{ゆか}の上に、一挺の短銃^{ピストル}が冷たく光っている。

豚のように肥えた死骸が一つ、寢台^{ベッド}の下に俯^{うつ}つ伏^ぶしていることがわかる。

血らしいものは、わりあいにごぼれていなかった。絨毯じゅうたんの模様になって見えているのかも知れない。

「……………」

旗岡巡査は、黙って、壁の側に立った。

寢台ベッドに腰をかけている犯人は、細巻の女煙草を紅い唇くちにくわえ、煙たそうに眼を細めながら、妖美な顔をよけい妖美に顰しかめている。

振袖のような絹の寝巻に日本の帯を締めて。——これはちようど、弁天通りの外人向きの商店ウインドの窓によくある洋妾ラシヤメンの絵そのままな姿態である。

「……………」

「……………」

この二人の沈黙は、今、旗岡巡査が一度ここを出て、窓から屋外の者へ、顔を見せて言葉を交わした、その前からの継続なのであった。——だから、彼がここをノックしてから、もう十何分か経過しているわけだった。

「海後かいごさん、まだよござんすか」

女は、煙草の灰を見ながらいった。

旗岡巡査は、頷いていった。

「まだかまわんです。ゆつくりお吸いなさい」

「繩をかけられればもう好きな煙草も吸えませんかね……。でも、慾をいえば限りがない」

深い嘆息ためいきをつきながら女は独り語ひとごとのように――

「わたし程、不倖ふしあわせな者はないと今日まで思っていたけれど、今夜の――たった今、わたしにも一つの倖せはあったような気がして来た。……海後さんに会えようなどは、夢にも思っていないかったのに、その海後さんの手で縛くられるなんて――やっぱり私のような女でも、何か、前世で一つぐらいは善い事をした功德くどくがあるのかも知れない」

「……………」

「あんまり吃驚びっくりしちまって、何だか、夢みたいな気がして仕様がな。あたしを縛りに来たお巡査まわりさんが、海後さんだったなんて、――ああ、これで死んでもいい！」

吸い切った煙草を、枕元の灰皿に揉もみ消しながら、

「――でも、海後さんは、ここへ這入って来る前から、私だっていることを、知っていたんですか」

「標札ひょうさつを見てすぐ思いだしたわけです」

「だって、あれからもう……」と指を折って——「十四、五年になるんですよ……その私
が——こんな踊りッ子みたいな恰好はしているけれど、もう三十にかかりかけているお婆
アちゃんになつてゐるんだものね。……標札の名を見ただけで、どうしてすぐ、思い出し
ましたか」

「あの時のこと、生涯、忘れてよいものではありません。——お松ちゃんという名。それ
から船鑑札ふなかんさつに書いてあつた木島村きじまむらという地名。——木島村、お松ちゃん。——こう二
つならべて心に銘記していたものです。……もつと忘れ難いのは、潮来いたこの真菰まごもの中に船を
繋つないで暮したあの時の四日ばかりのこと、お松ちゃんは、わしの袴はかまの血を洗つて、綻ほころびを
縫ぬいつてくれた」

「……………」

聞き入りながら、お松は頬に涙の筋を光らせて、しかもその甘い涙を愉ゆ悦えつするかのよう
に微笑ほほえんで、

「……じゃあ、海後さんは、これも覚えていますか」

と、自分のしている帯留を指で示した。

はなあやめ
花菖蒲を象徴した刀の目貫が、かつての形のまま帶留の金具となって用いられて
あるのだった。

「——持っていたか。今日までも」

すべての感動を喪失して、木偶のような十数年を送って来た旗岡巡査の頬に、眉に、筋肉に、火華のような烈しい感情のふるえが走った。

「……ええ、これだけは、お父さんと死に別れた後も、慥乎と持っていました。孤児
になつて、茶屋奉公に売られたり、博奕打の女房になつてみたり、神風楼の花魁に
まで身を落しても、これだけは肌身に着けていたんです。きっとこういう所で会う約束事
に極まっていたのかも知れませんか」

三

眞実は皆死んで行つた。

死に別れた過去の友と、もうこれもこの世の人ではないが、あの実兄 桑之介と。それ
以外、社会に眞実などは求めてもあり得ない。

こう冷たく頑かたくなに思い込んで来た旗岡巡査は、突然、十数年の埋うずみ火を掻き立てられるように、瞼まぶたを赤くし、今にも声をあげて泣くかのように顔の筋をぶるぶると吊った。

それを、じつと、泳こらえるように、壁際の位置から離れずに直立している。

どうして——あの純な船頭の小娘が、こうも変つて来たのか。怖ろしい殺人まで犯したのか。

とても簡単に、いいきれない気持もあるう、事情もあるう。聞きたい。聞いてやりたい。旗岡巡査は、暴風雨あらしのように翔かける血の中で焦躁した。

「……あ。下に来ているお巡査まわりさん達の声でしょう。何かまた、いつていますよ。海後さん、あなたの御迷惑になるといけませんから、もう、話はよししましょう。いくら話したつて、尽きませんものね」

寢台ベッドから離れて——こうお松はにこやかにいったが、それは泣いているとも笑っているともつかない不思議な顔の痙攣けいれんであつた。

「まだ……まだ……もう二、三分はいいです」

旗岡巡査がいうと、

「いけません」

お松は首を振った。

「あなたは、どうかして、わたしを助けようなんて考えていたら、大間違いですよ。昔と明治の御世とは、人間の生命いのちの値打ねうちがちがいますからね。……だけど、あたしやあもう、生きるのに草臥くたびれちまった。こんな豚に虐こき使われて」

寢台ベッドの下の下の丸っこい死骸を睨めつけて——また、不意に耳を欹そだてていった。

「海後さん、下で呶鳴うなっていますよ。もう駄目。……階段を駈はけ上がって来る足音がして
るじやありませんか」

「だいじよぶです。扉ドアは、鍵をかけてあるから」

「つまらない義理立てはよして下さいよ。そんなことを欣うれしがる程、今のわたしはもう素直な女じやありません」

白い腕かいなを、天井の銀洋燈ぎんランプへ伸ばした。——そして彼の顔へ眸ひとみを凝こらしながら、

「さようなら……」

いう一瞬に、燈火あかりは消えた。

同時に、短銃ピストルの音が、轟然ごうぜんと床を裂くように響いた。扉ドアは大勢の巡査の手で乱打されていった。

扉^{ドア}の外れた弾^{はず}みに、無数の足がなだれ込んだ。真つ暗な室内の闇に、人々は一瞬、深い沼へ向つたように足もとを竦^{すく}めたが、誰かが、蟬^{ろうそく}燭^{そく}を持って駈^かけ込んで来た。洋燈^{ランプ}もついた。

銀洋燈の白い光の下に、短銃を握つたお松の死骸が、元の小娘^{かえ}に回つたように、美しく死んでいた。

「……………」

旗岡巡査の姿は、やはり前の位置に、壁を背にして、懽然^{ぶぜん}と腕組^{うでぐみ}みしているのが洋燈^{ランプ}の光に見出されたが、誰一人、その姿を顧みる者などはなかった。

大勢の同僚の影が、たちまち、お松の死骸を囲んで、真つ黒な輪の中に蔽^{おほ}い隠してしまふと、旗岡巡査は、悄^{しょう}然^{ぜん}とその部屋から出て行つた。

それから十分間ほど後には、彼はまた、居留地十四番館の路傍へ戻り、黙然と、前のように見張に立っていた。

青空文庫情報

底本：「柳生月影抄 名作短編集（二）」吉川英治歴史時代文庫、講談社

1990（平成2）年9月11日第1刷発行

2007（平成19）年4月20日第12刷発行

初出：「週刊朝日 初夏特別号」

1937（昭和12）年

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：川山隆

2013年1月23日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

旗岡巡査

吉川英治

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>